

西暦 2008（平成 20）年、齢 72 歳、アフリカのウガンダから帰国した直後、突然脳梗塞にみまわれた。病をえてからは、わたくしは自宅に籠ることがおおくなり、元気なときにアフガニスタン、アフリカ、インドにおもむいて貧困緩和自立支援活動と称し、現地のめぐまれないエイズの孤児たちと日本庭園や土嚢ドーム（Earth-bag dome）による教室やエコヴィリッジなるものをつくった造園仲間の協力をえて、天理の拙宅のせまい空き地に、さまざまな石をあちこちにならべこしらえた自慢の庭いじりが日課となった。名園・作庭図鑑などを本棚からとりだし、各種のタケを植えたりしながら（なかにはタンザニアからもちかえり生育に失敗したアビシニカという筍からアルコールを産出する自慢の珍種もあった）、さまざまな形をした大小の岩石の配置のしかたにも工夫をこらして、ひとかどの造園者気取りになっていた。散歩中にも足をとめざるをえない形や色をもった、ひとさまが見ればなにの変哲もないであろう石ころにであえば、ビニール袋に入れて家にもちかえるほどにもなり、ついには近辺の古墳の瓦石の種類にまで、もちまへの好奇心が芽生えてくるしまつとなった。

わたくしがいま住む大和盆地の「山の辺の道」がはする天理市には、かつて天理教の信者詰所に駐屯していた 2 万人にもおよぶ予科練生がいた。国家は戦争末期沖縄が陥落し、海軍が奈良に大本営をうつし本土決戦にそなえようと計画。当時小学 3 年生であったわたくしは、自宅のそばを通る予科練生の行軍がだいすきで毎日それをながめるのがたのしみであった。いまかんがえてみると、三島町一番地の一列小路と称する長屋自宅の東側より、北にむかって整然と行進する予科練生には、昼夜 2 千人が交代で豊田山墓地の東側に隣接する一本松山に決められた天皇の「御座所」のトンネルを突貫工事で掘る目的がかせられていた。本土決戦にそなえて天皇陛下をむかえるためにつくられた施設である地下壕の資料をしらべるなかで、トンネルの黄土色の砂岩が「天理砂岩」（豊田砂岩）といわれる石であることがわかり、そのことが気になりだした。その理由は、斉明天皇（在位 655～661）の時代に飛鳥でつくられた亀型湧水遺構では、「天理砂岩」がその要石としてつかわれていたという考古学的発見が 2000 年に各新聞紙上でおおきく写真いりて掲載されたことをおもいだしたからである。くわえておどろいたことに、飛鳥のローマのコロシウムを想起させるようなその階段状の石組亀型湧水遺構の要石・豊田砂岩は、わが国最初の貨幣といわれる「富本銭」の鑄型にもつかわれていたという考古学の諸文献にもであり、ついにはわたくしの好奇心は岩石学や貨幣論にまでひろがってきた。

鑄型と雛型は脚韻でつながり、天理教教祖中山みきの「ひながた」の道にもつながっている。鑄型と雛型は単数が複数を含む元型であり、それなしには理想的共同体である国家を育て上げる手段はない。「みかぐらうた」に「一せん二せんでたすけゆく」と詠われる「せん」（銭）という口語も、火水風土の力で練磨された型からつくられたものでなければ偽物であろう。

つまり、かくたる元型にしたがっていないものは、信仰でさえすべて偽物でまぼろしにおわる。

このような連想の世界に遊んでいるなかに、ある日おおやまとの萱生環濠集落に住居をかまえる一人の不思議な古老としりあいになった。三輪山の北隣にならぶ龍王山の中腹に、古老が所有する広大な柿畑やミカン畑がある。その一角に野生の枝分かれした 10 数メートルもある楠・樟（くすのき）の古木が防風林のごとくに泰然と屹立している。

くすのきといえば、樟脳を産出するゆえか開花時には特異な芳香を放つ。日本最大の巨木は鹿児島県の八幡神社の「蒲生の大楠」（幹周 24.2 メートル）で神木としてあがめられ、国指定の特別天然記念物に指定されているのが有名である。虫害や腐敗に強いいため、古来から船の材料として重宝されていた。大阪湾沿岸からは楠製の古代時代の船が何艘も出土している。そのさまは古事記の「仁徳記」に登場する快速船「枯野」の逸話からもうかがうことができる。室町から江戸時代にかけては、軍船の貴重な材料にもなったといわれる。大和盆地が見事に一望できるこのくすのきのふもとで、明治の初期からはじまり、第二次世界大戦時の柳本飛行場のようすや特攻隊員との実話。そして過疎になりつつある眼下の故郷の悲しみを聞き、最後にその古老が少年のころかれの祖父がかたった遺言を、くすのきの下で聞くにおよぶこととなった。古老の語りのなかには『遠野物語』の一篇をおもいだすような奇奇怪怪な話もなかったではないが…。

「国中」のひとりの翁人から萱生環濠集落や、おおやまとの郷土史の語りを聴くうちに、わたくしのなかに飛鳥の酒船遺跡からみつかった石垣遺構や、隣接する亀型湧水遺構に天理砂岩がつかわれていたという考古学的な史実がおもいだされてきた。そこで南の三輪をながれる初瀬川の海石榴市を出発点とする古代「山の辺の道」を、その道の北の終着点であるとする考古学者がいう天理市の豊田山につなげ、村おこしをたちあげてはという妄想がたちあがってきたのである。

亀はいにしえから神仙界のつかいともいわれ、世界創造の神話とも関係がふかい。天理の人間世界創造・救済説話である「元の理」では、「くにさづち」の「つなぎ」の象徴でもある。中国の殷代にはすでに亀甲をもちいて卜占をおこない、その結果を文字で刻んだ甲骨文がある。「かしこね」（鱧）の「いきふきわけ」（文字の仕込み）の守護と、ちば甘露台を中心とした「つとめ」の配置において両者は東西方向で照応している。「奈良、初瀬七里の間は家が建て続き、一里四方は宿屋で詰まる程に。」という教祖中山みきの「道」の予言が、不思議にわたくしの頭のなかでゆっくりと亀とともに大和盆地を回転しはじめたのであった。

さて、くすのきとおなじく、神木としてあがめられてきた槻木（つきのき）というニレ科の落葉高木が飛鳥にある。古代「けやき」ともいわれ、昔おもに弓の材料とされた。飛鳥寺のけやきの下で、中大兄皇子と中臣鎌足が大化の改新の相談をし、大化の改新がおわたさいは、孝徳天皇一族の結束をそこで誓っ

たりしたと言われる。女帝斉明天皇朝の「両槻宮」関連遺構である最古の湧水遺構の近辺からは、日本最古の「富本銭」も数多く出土している。日本書紀は斉明天皇二年条(656)で「観(たかどの)を起つ。號けて両槻宮(ふたつきのみや)とす。」と語りかける。彼女は飛鳥の東に聳える多武峰の2本のけやきの麓に道教の「道観」をたて「両槻宮」としたが、それを「天宮」とも呼んだ。女帝は道教でいう仙人の住む不老不死の天上の宮のユートピア(理想郷)を、飛鳥の地に再現しようとしたらしいのである。

さきに述べた飛鳥と天理市の古代史へのロマンの延長線上に、中山みき教祖ご誕生の地が「おおやまと」といわれる由緒ある場所にあることに驚き、突然飛翔してきた着想が、先ず豊田砂岩を素材にして巨大な亀型土囊ドームを仲間とつくりあげ、それを土台にして隣接する槻木に数メートルの渡り廊下を檜材でつくり、その大樹枝上にやまと盆地が全貌できる「亀望楼」なる国見台(観・たかどの)を造るというものであった。土地と素材はその麓にある萱生環濠集落の古老が提供し、数年後には、このツリーハウスなるものが実現するという希望が現実の視野に入ってきた。

その道の駅を「山の辺の道中央駅と七陽古代庭園」とかりに名づけて、未来の「道の交差点」、つまり古代の人たちが呼んでいた「チマタ」構想なるものを立ちあげた。現在予算皆無のそのおおらかでグローバルな夢プロジェクトについては、連載の最終章に詳述できればと期待している。

このような陽気遊びの発想が突然やってきたのも、2000年に発見された亀型石造物と斉明天皇が7世紀に豊田山から「狂心渠」(『日本書紀』斉明2年)と掘られた運河をつくり、豊田山の天理砂岩を200艘の船で飛鳥まで運ばせたと解釈される「石」のさまざまな情報がわたくしの好奇心をうながしたからにちがいない。まえから石には異常なほどにこころがうばわれていて、拙宅の庭や書斎の引き出しには世界中からもちかえった、すくなくとも自分には意味のあるさまざまな思い出を刻んだ小石が数多くころがっている。まえおきがながくなったが、この論考に嵌ることとなった直接のきっかけも、実はこれらわたくしの実存的「石神」(?)たちがもたらしたものであるかも知れないということを言いたかったためである。

わたくしは天理教の朝夕のおつとめの後に「みかぐらうた」の「ておどり」をする。その台本に現れていることばの意味やつながりを、視覚をとおしてみきわめて舞うわたくしからは、神のことばの想いに自然にうごかされていることを知っている。「ておどり」がおわり、正座して「おふでさき」をおもむろにひらき、きめられた連歌を一瞥してから、一首一首のことばを、知力ではなく眼力で行間まで気をくばり、自分が連歌を詠う発声音を同時に意識的にこころで聴きながら、視読と聴読を同時進行させている。つまり、視力と声調による聴力を交差あるいは同調させながら、その時の気候の湿り気にも影響される発声の音質や体調とのあわいから醸しだされるイメージや

ひらめきの心象風景を楽しんだり、あるいはまた勇んだりおそれたりして、わたくしの1日のはじまるのである。

ある朝のことであつた。「みかぐらうた」の八下り目の第一節「ひろいせかいやくになかに いしもたちきもないかいな」という歌の「くになか」ということばの意味が気になりだした。「くになか」(国中)とは、ひろい世界を構成する国々(諸国家)の「中」(地域)を意味しているのではなく、山間部の山中「さんちゅう」に対して、大和の盆地平野にあたる特殊な場所を指しているはずだという直観である。力点は「山中」に対する大和盆地に囲まれた独自の「平野」ではないかという疑問から、国際的に著名なエランベルジェの精神力動心理学をわが国に紹介した奇しくも「国中」の天理市三味田出身の精神医学者である中井久夫氏の『治療文化論—精神医学的再構築の試み』(岩波書店)のなかにある(氏がわたくしに文化人類学者のほうが精神科医よりもこの図面には関心を示してくれたと語った)盆地がもつ文化精神的な特徴を説明してくれたことをおもいだし、氏の著書を再読した。その図(52~53頁)には、30数カ所の「国中」「山中」の地理・精神的要素がコスモロジカルに解説してあり、みきの生地としての三味田も、天理おやさとやかた、大和神社、石上神宮もある。「国中」の時は流れて、今年の今月は、教祖殿(現在の祖霊殿)新築の大正3年から百年になる。

最後に、中井氏の「国中」の象徴的な解説文を紹介しておこう。それらは「国中」平野と、住まわれている傾斜地の関連性にみられる卓見の数例である。

盆地においては、

鉄道は必ず、国中のへりを走り、唐招提、薬師の二寺以外のすべての聖地は、鉄道の山側にある。聖地に参る人は決して鉄道を降りて国中側へと行くことはない。

笠置山脈の内陣(「国中」からみえず異界として予感されている)。

三輪山—古代人がもつとも秀美とした山。山全体が神体で、山上の岩むらが、内障中の内障である。

二上山(ふたかみやま。現在、にじょうさん。特異な二峰で、その中間に日が没し、西方浄土よりアミダが来迎するとされた)。

中井氏はこのような調子で世界の盆地平野を調査し、「山中」「国中」を地理学的な文化精神論のコスモロジーとして、その普遍の意味を抽出しているのである。従来の天理教原典にみられる「国中」や「石」という言葉も、単なる空間としての場所や鉱物を指すとして説明するだけでは同義語反復にしか過ぎないとおもわれ、そのレベルに定着するかぎり神意の核心にはせまりえない。また教義の思想化も視野に入っていないであろう。天理教用語における言語解釈の従来の散文・逐条的な在り方への自己・自教批判は、できればのちほど稿をあらためておこないたい。